

昭和石油（株）品川研究所の思い出

工学博士、(元)上智大学教授

石井 直治郎

私が品川研究所に所長として就任したのは昭和27年9月である。昭和37年7月平沢製油所に転任するまでほぼ10年間在職した。就任当時を顧みると、戦争とそれに続く困難な時代をのりこえて、ようよう発展の時期を迎えた昭和石油にとって、弱みの一つは科学技術陣が育っていなかったことであろう。当時の常務別府良三氏は思いをここに致され、技術者の交流を盛んにおやりになったが、研究所に期待するところは、人材の育成について大きなものがあった。それまでおった老練に加勢して新進気鋭が優先的に品川研究所に配置された。現在、昭石中研をせおい、また、中研出身で昭石内外で技術活動をしている人材は、おおかた、それら若い所員達なのである。昭和28年暮、別府常務が急逝され、突如として大事な指導者を失った私共は悲しみの極みであったが、奮起一番、研究技術陣の整備を一つの根本方針としたのであった。研究者の育成と試験研究設備の充実、それから、皆無に近かった参考図書、雑誌の整備が目下の急であった。

品川研究所は、個人経営の小さなグリース工場を転用したもので、敷地もせまく、建物も手狭で、きたなかった。しかし、人材と設備、いわば内容が充実して、あふれるようになれば、金さえかければ、そのいれものはおのずから立派なものができるものと考えられた。はじめ 50 人に満たない所員の努力と協力によって着々と充実して行ったのである。別府常務の取り計らいで、毎週一度来所されて研究所をみていて下さった田中芳雄先生が品川研究所報(Vol.11, No.3)に寄せられた「品川研究所の側面観」の中で、先生は次のように述べておられる。「品川研究所は最近に於いて著しい改造を行い、設備の充実に邁進しつつあることは誠に心強いことである。両三年前のあの荒涼たる廃墟のようなままに放任された名ばかりの研究所が、今や狭いながらも研究所の名に恥じない有様に立ち上がったことは、故別府常務や藤沢部長の達見と努力と会社首脳部の理解の結果であり、この点からも度々研究所を訪れた別府常務の急逝が惜しまれてならない。私はこの研究所の設備の一層の完備と研究の格段の進歩を期待すると同時に、将来更に大昭和石油の研究所としてふさわしい大研究所が、現在のような陋屋の立ちならぶ巷から移って、環境の良い、かつ火災の危険もない塩風の吹き込まない安全な近郊に出現する日を期待したい」と。この文章を読み、今日の昭石中研の姿とを思いあわせる時、今昔の感に耐えないものがある。

事業会社が研究をするのは、それによって有形無形の利益を得んとする意欲によるもので、見栄でも、公共のためでも、学問のためでもないのであるが、その研究のし方の中には学会や業界の進歩を充分取り入れて自分の会社の技術進歩と利益を計ることが眼目である。時、偶々、戦後、再開された石油産業の復興期であり、また、全く新しい技術の勃(ぼつ)興期でもあったので、その日進月歩と共に進むことを配慮して、むしろ、せおいきれないほどの試験、研究テーマは選ばれた。研究所は会社の10年先の夢をさきどりして、その分野のリーダーシップをとる意気ごみと覚悟が必要である。やがて、それは会社の技術水準の格付けとなり、製品に対する世間の信用となってもどってくるにちがいない。真に時代の要求に応じうる新製品も生まれてくるものと言えよう。一見、アカデミックにみえても、会社の研究態度としてはそのことを忘れてはならない。そのような理念のもとに、各種製品の性能試験とそれを向上させるべき技術的手段、たとえば自動車燃料の性能試験、灯油の燃焼テスト、潤滑油の潤滑性能研究などが取り上げられた。その為には石油の成分分析の新しい方法、製品の物性に関するテーマなどはアカデミックのようにみえても、痛切に必要なものなので、実用的成果をみることに性急な方の研究所は大学のそれとは違うよという批評を切に感

じながらも、所長として私は上記のような指導方針をとった。その成果の一つとして、粘度に関する木下所員の 10 年余に渉る研究は昭和石油の研究所の高い水準を国の内外に認めさせる大きな成果となった。粘度計校正用標準液の製造を開始し、昭和 35 年 8 月早くも日石、丸善、出光等国内 30 余社に提供した。

クロマトグラフが、分子量の大きな石油類に適用された研究報告で私をはじめて接したのは第3回世界石油会議(ローマ、1955 年)に提出された論文だったと思うが、品川研究所では藤田所員が担当して、いち早く基礎研究開発を行ない、会社内外の技術界に大きな貢献をする成果を得ている。

これら製品試験や基礎研究とは別に、会社の将来の夢ともつながる研究として、安井、吉野、橋爪その他の所員が担当して石油のガス化研究を昭和 28 年からやったのも当時の品川研究所の実状からいって、よくやったなあという印象がのこっている。

これは、石油の化学原料としての基礎研究の立場で取り上げたものであったが、昭石関係の、あるいは国内の石油化学工業とどのように

結びついてゆくか、五里霧中ではじめてのものであったが、工業技術庁のみとめるところとなり、昭和 29 年度応用研究助成金 50 万円が下付されたことが思い出される。これは重質留分の熱分解ガス化であって、やがてわが国で取り上げられたナフサの熱分解によるエチレン系ガスの製造には結びつかなかったが、今日原料ガスの資源として重質油が再検討されていることを耳にすると技術の変遷は面白いものであると思われる。

品川研究所時代、昭石のグリース製造と、基礎研究は国内をリードしていた。リチウムグリースやバリウムグリースはその目玉の一つであった。川崎製油所と協力して、マイクロクリスタルワックスを日本で初めて生産し、当時の輸入を防止したことも思い出される。電気絶縁油とタービン油は日立製作所規格というものがあって平沢製油所と共に大変な苦勞の結果、同社への納入を達成した。そのように製造現場との協力関係を持ったテーマも数多く記憶にのこるが、販売関係への技術サービスもおこたらなかった。

思い出すまま、いくつかの例をあげたが、はじめに述べた研究所の理念の 10 年間における進歩に触れたかったのである。

品川研究所も 10 年たって、所員数も 100 人を越えたが、人間関係についても思い出は多く、語ればながくなりそうである。本社にゆくと、折に触れて研究所は赤ですわとつぶやく人もおったが、所内は春風に育くむ緑であった。少なくとも私にとっては、昭石勤務中最も楽しく働けた職場であった。昭和 29 年 7 月のことであったが隣接する約 1,700 m²の土地と 2 棟約 200 m²の木造家屋が手にはいったので、早速、エンジンテストの場所などをつくと同時にテニスコートを含む運動場をつくり、浴場、休憩室などもある、ささやかなリクリエーションの場ができた。田中先生にいわせると塩風の吹き込む研究所に不向きな立地条件を逆に利用して、若い人たちはヨットを楽しんだ。たしか、シーホース型を手に入れたと記憶する。研究のあいまに辛うじてピンポンをやり、囲碁、将棋ぐらいしか芸がなかった一同にとって、ありがたい幸せであった。余談であるが、当時はまだ希少価値であった理系女子、大阪大学理学部化学科卒の角 京子(かど けいこ)さんが配属された。大変な才女で研究の仕事も優れていたが、ピンポンなども男性の所員に引けをとらない。ために所員全体が何となく張り切って、研究の能率がぐんとあがった。良い性格でもあったのでやがて出身大学の若い先生と結ばれていっしょに学究生活を続けておられる筈である。

当時、京浜地区に石油会社の研究所としては日本石油中研、三菱石油の研究所と品川研究所の3つがあった。この3者は互いに親しくつきあい、野球やテニスの試合など楽しい思い出が沢山のこっている。いっしょに遊ぶこともさることながら、互いに切磋琢磨して所員も100人以上となり、図書も増築した書庫に入れ切れなくなり、人も資材あふれる状態となり、内容的には他の2研究所と肩をならべて、そうみおとりしないものになっていった。

もう20～30年昔のことで記憶も不確実になったので、錯誤している点については御許し願いたい。(完)

(注)本原稿は、2026年4月会員藤田稔氏より提供されたもので、昭和50(1975)年頃、「昭和石油(株)研究所の歴史」の本を作る企画があり、藤田稔氏が編集委員長で、石井直治郎先生にお願いして書いていただいたものである。結局、本の制作・出版には至らず、未発表原稿である。

(2026/4/19 編集)